

中国語構造助詞「的」の歴史の変遷

—表記と構造から考える—

于 飛

0. はじめに

中国語の文法でいう「構造助詞」とは単語や句（フレーズ）の構成関係に深くかかわる助詞のことである。「的」は中国語の中によく用いられる構造助詞で、体言を修飾する機能を持ち、普通の構造は「定語（連体修飾語）+的+名詞」である。構造助詞の役割は簡単に言えば「単語や句（フレーズ）に付加して構造を拡大する」ことである。例えば、「我（私）」という代詞を「的」という構造助詞を用いて「我的书（私の本）」という名詞句に拡大する（松村 1997）。本論文は「的」の表記と構造の歴史の変遷について、考察する。

1. 近代中国語における構造助詞「的」の研究

「的」はもと「底」と書かれている。そのことを時代を追ってみたい。

1.1 中国の唐代

構造助詞「的」の最初の形は「底」という漢字で書かれて、中国の唐代に初めてみえてくる。最初に記載された文献の中には以下の二つの用例しかない。「底」の構造は「X（名詞、代名詞、動詞、形容詞）+底」及び「X（動詞、形容詞）+底+名詞」である。次は最初の2例をとりあげる。

①崔湜之为中书令，河东公张嘉贞为舍人，湜轻之，常呼为“张底”。后曾商量数事，意皆出人右，湜惊美久之，谓同官曰“知无？张底乃我辈一般人，

此终是其座处。”(『隋唐嘉话』, 49 ページ)

ここの「张底」の意味は「姓张的(張という人)」で、「名詞+底」の構造である。

②周静乐县主, 河内王懿宗妹, 短丑; 武氏最长, 时号“大歌”。县主与则天并马行, 命元一咏, 曰: “马带桃花锦, 裙拖绿草罗。定知纱(帙)帽底, 仪容似大歌。”(『朝野僉载』, 87-88 ページ)

ここの「纱(帙)帽底」の意味は「戴纱(帙)帽的(帷のような帽子をかぶる人)」で、「動詞(動賓連語)+底」の構造である(中国語の方は動詞を省略された)。

晩唐から、「底」の用例はだんだんと多くなった。この証拠として『敦煌变文校注』という文献をあげることができる。『敦煌变文集』の中に「底」が全部で14例現れる。次はこの14例を全部とりあげる。

③弟一旦道上头底, 第二更道东头底, 第三更道西头底。(『不知名变文』)
以上3例は「名詞+底」の構造である。

④善德, 善德! 莫将浮贿施为, 非是菩萨行藏, 此是俗门作底。(『维摩诘经讲经文』)

其医人忽尔抬头, 见此中官, 更言曰: 阿姨道底是那。(『维摩诘经讲经文』)
以上2例は「動詞+底」の構造である。

⑤到家各自省差殊, 相劝直论好底事。(『解座文汇抄』)
これは「形容詞+底+名詞」の構造である。

⑥惟愿如来慈念力, 为说前生修底因。(『金刚丑女因缘』)

闲闲夏泰礼贫道, 欲说当本修底因。(『目连变文』)

佛把诸人修底行, 较量多少唱看看。(『妙法莲华经讲经文』)

惟愿世尊愍四众, 解说昨夜见底光。…汝等昨夜见底光, 非是释梵四天王。(『频婆娑罗王后宫彩女功德意供养塔生天因缘变』)

我等摆头嫌底事, 他家心愿不忙惊。(『妙法莲华经讲经文』)

酬报因中行底行, 故教作用满三千。(『妙法莲华经讲经文』)

已满今生发底愿, 并无魔难及诸灾。(『维摩诘经讲经文』)

以上8例は「動詞+底+名詞」の構造である。

1.2 中国の五代時期

中国の五代時期から、助詞「的」はまだ「底」で表記し、禅宗の文献の中によく用いられている。『祖堂集』をその代表としての例を示すと、その中に「底」が230例くらいあらわれる。この時期の「底」の構造は「X（名詞、代名詞、動詞、形容詞）+底」及び「X（動詞、形容詞）+底+名詞」である。以下に『祖堂集』の中の「底」の名詞性構造の用法の例をとりあげる。

⑦师带刀行次，道吾问：“背后底是什摩？”（卷四『药山和尚』）

师因看经次，洞山云：“就师乞眼睛。”师曰：“汝底与阿谁去也？”（卷五『云岩和尚』）

有一日，其道者提蓝子摘梨。盛蓝次，师问：“蓝里底是什摩？”（卷十六『南泉和尚』）

以上3例は「名詞（方向名詞、代名詞を含む）+底」の構造である。

⑧是你三家村里男女，牛背上将养底儿子，作摩生投这个宗门？（卷三『慧忠国师』）

你去东边仔细看石头上坐底僧，若是昨来底吼声，便唤他。（卷四『药山和尚』）

念底『心经』尚乃未会，不用上别经。（卷六『洞山和尚』）

如今我向三乘十二分教且不是，所以解修行底人不落因果，不解修行底人落他因果。（卷十六『南泉和尚』）

以上4例は「動詞（動詞連語）+底+名詞」の構造である。

⑨有个人家儿子，问著无有道不得底。（卷五『云岩和尚』）

乞眼睛底是眼不？（卷五『云岩和尚』）

这个是拣底，不拣底把将来。（卷六『洞山和尚』）

夜来还有悟底摩？乞个消息。不悟底摩？乞个消息。悟底是，不悟底是？（卷十一『保福和尚』）

以上4例は「動詞（動詞連語）+底」の構造である。

⑩有一日，不安底上座唤同行云：“某甲欲得去，一时相共去。”（卷六『洞山和尚』）

洞山问：“阁梨名什摩？”对曰：“玄机。”“作摩生是玄底机？”（卷九『龙牙和尚』）

以上2例は「形容詞＋底＋名詞」の構造である。

⑩供奉又问：“如何是实相义？”师曰：“将虚底来。”对曰：“虚底不可的。”师曰：“虚底尚不可得，问实相作什摩？”（卷三『慧忠国师』）

近日禅师太多生，觅一个痴钝底不可得。（卷十六『南泉和尚』）

以上3例は「形容詞＋底」の構造である。

『敦煌变文集』と『祖堂集』の用例からみると、「底」の構造は最初に「X（名詞、動詞、形容詞）＋底」の構造が見えていて、その後に「X（動詞、形容詞）＋底＋名詞」の構造が出ている。「名詞＋底＋名詞」の構造は『敦煌变文集』と『祖堂集』両文献に用いられていない。

1.3 中国の宋代

中国の宋代から、「底」の構造は新発展があった。これは「底」の構造の類型の完備と用法の拡大からみられる。そして、表記としては、北宋の時期から「的」の形も出ている。「底（的）」の構造は「X（名詞、代名詞、動詞、形容詞）＋底（的）」及び「X（名詞、動詞、形容詞）＋底（的）＋名詞」である。

構造からみると、「形容詞＋底＋名詞」の構造はこの時期によく見られる。

⑫臣括答云：“但没便宜底文字，便总道‘错误’即休，怎生似的？”（『乙卯入国奏请』）

⑬且如狗子，会咬人底，便是禀得那健底性；不咬人底，是禀得那顺底性。（『朱子语类』）

⑭若如此看，只是理会文义，不见得他深长底意味。（『朱子语类』）

⑮只如冷底水，热底水，水冷底，水热底一般。（『朱子语类』）

⑯不读正当底书，不看正当注疏，偏拣人所不读底去读，欲乘人之所不知以夸人。（『朱子语类』）

「名詞＋底＋名詞」の構造は唐代と五代時期には用いられていないが、北宋中期から多くの用例が見える。

⑰循性者，马则为马之性，又不做牛底性；牛则为牛之性，又不为马底性。

〔『二程集』〕

⑱孟子将四端便为四体，仁便是一个木气象，恻隐之心便是一个生物春底气象，羞恶之心便是一个秋底气象；只有一个去就断割底气象，便是义也。…如其子爱其母、母爱其子，亦有木底气象。（『朱子语类』）

⑲凡读书，先须晓得他底言词了，然后看其说于理当否。（『朱子语类』）

⑳别人底事，便说不关我事。（『朱子语类』）

㉑冉求之病，乃是子路底药；子路底病，乃是冉求底药。（『朱子语类』）

㉒只是鸟兽底知觉不如人底，草木底知觉又不如鸟兽底。（『朱子语类』）

唐代と五代時期の「代名詞+底」の構造の中の「代名詞」はほとんど「人称代名詞」で、宋代からの「代名詞」は「人称代名詞」以外に、「指示代名詞」（这底：この、那底：その・あの）および「疑問代名詞」（甚底：どの・何の）もよく用いられている。

㉓师曰：“这底不生死。”（『五灯会元・石巩慧藏禅师』）

㉔颖曰：“此是楼板、云内两寨接界处照证。这底且休，且未理会，此中更有照证在。”（『乙卯入国奏请』）

㉕译者云：“这底只是我怕你们不知，又怕皇帝位高职大后不记得也。”（『绍兴甲寅通和录』）

㉖至若万物之荣悴与夫动植小大，这底是可以如何使，那底是可以如何用，车之可以行陆，舟之可以行水，皆所当理会。（『朱子语类』）

㉗“汤武之反也”，便也是有些不那底。（『朱子语类』）

㉘生物都从那上做来，万物流形天地之间，都是那底做。（『朱子语类』）

㉙释氏之云觉，甚底是觉斯道？甚底是觉斯民？（『二程集』）

㉚不知乾、坤外，甚底是六子？（『二程集』）

㉛只是家常便饭，夸逞个甚底？（『二程集』）

㉜且莫看他别事，只如『礼记·曾子问』一篇，他甚底事不曾理会来！（『朱子语类』）

㉝此是甚底心？浑然是个天理。（『朱子语类』）

㉞前日上殿，有个生得貌寝，是言此。忘了甚底官人，论议甚好。（『朱子语类』）

㊸ 孟子是甚么底资质，甚么底力量！（『朱子语类』）

㊹ 客店中无甚底事，便去睡。（『简贴和尚』）

表記方法からみると、宋代には「底」の代わりに「的」が用いられはじめる。しかし、この時代に「的」の使用量はまだ少ない。

㊺ 南朝煞是应副本国也，如有些小的的公事，也且休恐恶模样。（『乙卯入国奏请』）

㊻ 某记少年应举时，尝下视那试官，说他如何晓得我的意思！（『朱子语类』）

㊼ 哥也，那的是孙二的罪。（『杀狗劝夫』）

㊽ 茶博士道：“官人，你却文（有）恁的本事！”（『杨温拦路虎传』）

1.4 中国の元・明・清時代

中国の元代から、表記としての「底」の代わりに「的」という漢字がよく用いられる。「的」の構造は「X（名詞、代名詞、動詞、形容詞）+的」及び「X（名詞、動詞、形容詞）+的+名詞」である。そのうえに、構造助詞としての「的」も新しい機能が生まれた。ここで、「的」の新機能について説明する。

（1）「的」は文末に位置するとき、強調する機能を持っている。

㊾ 俺商量得，这张千户根底敲了，他的家缘断没了，断没了的。（『元典章』）

㊿ 我这里今年夏里天旱了，秋里水涝了，田禾不收的。（『老乞大』）

㊽〇 这孩儿亭亭的么？恰学立的，腰儿软，休弄他。（『朴通事』）

㊽〇 他不曾开铺的。（『朴通事』）

㊽〇 这个段子中中的的，你再馈我绝高的。（『朴通事』）

もし「的」は疑問文の文末に位置づいたならば、その強調の機能はもっと強くなった。この用法は明清の大衆小説の中によくみかける。

㊽〇 构栏里看杂技去来。去时怎么得入去的？（『朴通事』）

㊽〇 韩持国说：“争奈我受大官人好处，怎好变心的？”（『金瓶梅词话』第81回）

㊽〇 有与没，俺们到前边只说的一声儿，有哪些声气的？（『金瓶梅』第11回）

（2）「的」は主語と述語の間、あるいは述語の動詞と目的語の間に位置づけられるとき、強調する機能を持っている。「主語+的+述語」の場合は主

語を強調し、「動詞+的+賓語（目的語）」の場合は賓語（目的語）を強調している。

④ 一百个钱，与你多少的是？随你与的是？（『老乞大』）

（「的」は「多少」と「你」を強調する。）

⑤ 你们胡讨价钱，我还你多少的是？（『老乞大』）

（「的」は「多少」を強調する。）

⑥ 这里离城有的五里路，着两个后头赶将头口来。（『老乞大』）

（「的」は「五里路」を強調する。）

⑦ 那婆娘信以为真，即忙做的老米干饭，煎的豆腐，炒的白菜，都使盆罐盛了。（『醒世姻缘传』）

（「的」は「老米干饭」と「豆腐」と「白菜」を強調する。）

2. 現代中国語における構造助詞「的」の研究

現代中国語で最も多く用いられる漢字が「的 (de)」で、使用頻度はおそらく5%を超える(100字のうち5字以上を占める)。現代中国語において、「的」は使用頻度といい機能といい、きわめて重要な助詞である。ここで、筆者は現代中国語の文法研究における「的」の研究について、現代漢語辞典での説明および朱德熙氏の著作—『現代漢語語法研究』（1980年）でみていきたい。

2.1 現代漢語の辞典での「的」の説明

現在用いられた現代漢語の辞典は多く存在している。その中で、中国で最も権威あるものは中国社会科学院言語研究所辞典編纂室編の『現代漢語詞典（修訂版）』（2001年）であり、最も詳しいものは大東文化大学中国語大辞典編纂室編の『中国語大辞典』（1993年）である。この二冊の辞典を調べて、「的」という漢字には三つの発音があることがわかった。その中の「的 (dí)」（的确：たしかに）と「的 (dì)」（无的放矢：的なしに矢を放つ）の二つは語彙的意味をもつ。ここではただ文法の構造助詞としての「的 (de)」の用法に限ってみていく。

『中国語大辞典』（1993年）での「的」の研究

(1) 「定語+的+中心語」の基本構造—「的」はほかの語句(名詞、動詞、形容詞、擬声語、一部の副詞、連語、四字の成語など)について句をつくり、名詞を修飾、限定する(「連語」についての説明P60—1.2の(2)参照)。

(a) 「定語(名詞、動詞、形容詞、連語)+的+中心語」の構造—中心語を説明する。

①铁的纪律(鉄の規律)

②群众的力量(大衆の力)

③牛皮纸的信封(ハترون紙の封筒)

以上3例は「名詞+的+中心語」の構造である。

④旋转的木马(回転する木馬)

⑤走的人(歩く人)

⑥研究的问题(研究する問題)

以上3例は「動詞+的+中心語」の構造である。

⑦红色的气球(赤い風船)

⑧小小的进步(小さい進歩)

⑨美丽的风景(綺麗な風景)

⑩安静的校园(静かなキャンパス)

⑪幸福的生活(幸せな生活)

⑫聪明的人(聡明な人)

以上6例は「形容詞+的+中心語」の用例である。

⑬拍的一声(ぱんという音がした)

これは「擬声語+的+中心語」の用例である。

⑭打电报的费用(電報を打つ費用)

⑮关于地震的知识(地震に関する知識)

⑯下车的地点(下車する所)

⑰我在北京的时候(私は北京にいたとき)

以上4例は「連語+的+中心語」の用例である。

(b) 「定語(名詞、代名詞)+的+中心語」の構造—所有所属関係を表す

⑮我的母亲（私の母）

⑯他的书（彼の本）

⑰我的姐姐在那里工作。（私の姉はそこで働いている。）

以上3例は「代名詞+的+中心語」の用例である。

⑱无产阶级的政党（プロレタリアの政党）

⑲中国的领土（中国の領土）

⑳应该重视群众的意见。（大衆の意見を重視すべきである。）

以上3例は「名詞+的+中心語」の用例である。

(c)「定語（人名、人称代詞）+的+中心語（職務や身分を表す名詞）」一人を指す名詞・代詞と、職務や身分を表す名詞の間に「的」をおく場合はその人がその職務を担当するあるいはその身分を取得することを意味する。

「定語（人名、人称代詞）」を強調する。

㉑今天开会是你的主持（今日の会議はあなたが司会です）

（「的」は「你」を強調する）

㉒谁的介绍人（だれの紹介人）

（「的」は「谁」を強調する）

㉓今天我的东，你们一定都要来。（今日は私がおごりますから、皆さんはぜひ来てください。）

（「的」は「我」を強調する）

(d)「動詞+定語（人名、人称代詞）+的+中心語（前の動詞の目的語）」一人を指す名詞・代詞に「的」をつけた句か、動詞と客語よりなる句の間に挿入されている場合、その人がその動作の対象であることを表す。「定語（人名、人称代詞）」を強調する。

㉔开他的玩笑（彼の冗談をいう）

（「的」は「他」を強調する）

㉕找我的麻烦（私に面倒をかける）

（「的」は「我」を強調する）

㉖别生我的气（私に腹をたてないでください）

（「的」は「我」を強調する）

(2)「名詞、代名詞、形容詞、動詞、連語+的」の基本構造としての「的」字句（「的」の連語）一準体助詞

(a)修飾される名詞が前に出ている人、物である場合、「的」は前の文章に言及されたものをさす。

②这是我的书，那是你的。（これは私の本で、それはあなたのだ。）

③我的笔忘带了，借你的使使。（私のペンを忘れたから、ちょっと君のを貸してくれ。）

以上2例は「代名詞+的」の構造である。

④这架钢琴是新买的。（このピアノは最近買ったものです。）

これは「動詞+的」の構造である。

⑤菊花开了，有红的，有黄的。（菊が咲いている。赤いのも黄色いのもある。）

これは「形容詞+的」の構造である。

(b)修飾される名詞が前に示されていないが、なんであるかわかる場合、「的」は特定の人か事をさす。

⑥男的，女的。（男の人、女の人。）

これは「名詞+的」の構造である。

⑦我爱吃辣的。（私は辛い料理が好き。）

これは「形容詞+的」の構造である。

⑧卖报的已经走了。（新聞売りはもう行ってしまった。）

これは「連語+的」の構造である。

(c)文頭の句の後ろに用い、原因・条件・状況などを強調する。「的」は特定の状況（普通は逆の状況）をさす。普通は口語で用いられる。

⑨大星期天的你，你怎么不出去玩？（日曜日なのに、何で遊びに行かないか？）

⑩无缘无故的你，你着什么急？（君はなぜ理由もなしに気をもんでいるか？）

(d)「主語と同じの人称代名詞+的」の構造—主語と同じ人称代詞に「的」をつけたものが客語になると、ほかのことがその人と無関係、あるいはそ

のことがほかの人とは無関係であることを表す。動作の主体を強調する。

㊸这里用不着你，你只管睡你的去。(ここは君に手伝ってもらうまでもないから、かまわずに眠ってもいい。)

㊹你们讨论你们的，我不参加。(皆さん、私にかまわないで討論してください、私は参加しないから。)

㊺他睡他的，咱们干咱们的。(彼は寝たいなら寝させておきなさい、私たちは私たちがやりましょう。)

(e)「X(動詞) + 的 + X(動詞)」の構造—「的」の前後同じ動詞・動詞句を用い、これと同じ構造の句を連用すると同一時間にそれぞれがそれぞれの活動をすることを表す。

㊻推的推，拉的拉。(押すのもいるし、引くのもいる。)

㊼说的说，笑的笑。(話すのもいるし、笑うのもいる。)

(f)「X(形容詞) + 的 + X(形容詞)」の構造—「的」の前後に同じ形容詞を用い、これと同じ構造で、形容詞の意味が相反する句を用いるといずれも適当でないことを表す。

㊽这几双鞋，大的大，小的小，我穿都不合适。(この靴数足、いずれも大きすぎたり、小さすぎたりして、どれも足にあわない。)

㊾这几篇文章，深的太深，浅的太浅，做二年级汉语教材都不合适(この数編の文章とも、難しすぎたり、やさしすぎたりして、どれも二年生の中国語教材としては適当でない。)

(3)「述語(動詞) + 的」の構造—一文の述語と客語の間に「的」をおくと、すでに発生した動作の主体あるいは動作のなされた時間・場所・方法などを強調する。

㊿谁买的书？(だれが買った本。)

(「的」は「谁」を強調する)

㊽他是昨天来的。(彼は昨日来た。)

(「的」は「昨天」を強調する)

㊽我是在车站买的票。(私は駅で切符を買った。)

(「的」は「车站」を強調する)

(4)「的」は描写性の語句について句を構成し、状態を表して、述語になつたり、状態補語になつたりする。

④外边又敲锣又打鼓的，什么事？（外でどらや太鼓を鳴らしているが、何ことですか。）

⑤街上静悄悄的，没有行人的声音。（通りはひっそりとしていて、道行く人のけはいもない。）

⑥桌上乱七八糟的。（机の上が乱雑だ。）

⑦他的脸晒得黑油油的。（彼の顔は真っ黒に日焼けしている。）

⑧今天玩儿得痛痛快快的。（今日は思い切り遊んだ。）

(5)「的」は並列された語句の後ろに位置づける場合、などの意味を表す。

⑨我想开个小店，卖点针头线脑的，也可以赚几个钱。（私は小さいお店を造りたいけど、裁縫用の針や糸などを売って、少しお金が儲けられると思う。）

⑩你别听那些闲言碎语的，为他们生气伤身子，不值得。（君はそんな不平や不満などの話をきくな、そのために怒って気を遣いする値うちがない。）

⑪明天就开学了，书啊本的你都准备好了吗？（明日から新学期なので、君はテキストやノートなどを全部用意してしまったか。）

(6)「数量詞+的+数量詞」の構造

(a)掛ける（「×」）意味を表す。

⑫这间房子是五米的三米，合十五平方米。（この部屋の大きさは3メートル掛ける5メートル、合計15平方メートルです。）

(b)足す（「+」）意味を表す。普通は方言の中に用いられる。

⑬两个的三个，一共五个。（二つ足す三つは五つです。）

(7)「的」は平叙句の末尾に位置づける場合、確認・断定の語気を表す。

(a)肯定（確かにそうである）の意味を表す。

⑭这件事儿我知道的。（私はこのことを知っている。）

⑮我也是这么想的。（私もそう思っている。）

(b)すでに発生したことを表す。

⑯我骑车去的。（私は自転車で行った。）（すでに行っている）

㊤我们由西直门进城的的。(私たちは西直門から城内に入っている。)(すでに入っている)

(8)「的」は方言の中に「在」と同じの意味を表す。

㊤站的地上(地に立つ)

㊤靠的树上(木にもたれかかる)

2.2 朱德熙氏の『現代漢語語法研究』(1980年)での「的」の研究

朱德熙氏の『現代漢語語法研究』(1980年)によると、助詞「的」は三種の異なる機能を示すという。

(1) 副詞の後置成分

二音節の副詞の中に、後ろに「的」をおく例をよく見ることがある(「渐渐的」:だんだんと、「赶紧的」:急いで)。「的」があってもなくてもいいが、どちらにしても副詞として働くことにかわりなく、別に新しい機能も加わらないので、この「的」は副詞の後置成分だということができる。

㊤非常痛快(非常に痛快だ)＝非常的痛快

㊤渐渐习惯了(だんだんなれた)＝渐渐的习惯了

ほかに、「十分(十文に)」、「忽然(突然)」、「简直(まったく)」、「明明(明らかに)」、「偏偏(あくまでも)」などの数につく少なくない。しかし、これらがどんな場合に「的」をおくのか、おかないのか、まだ十分明らかになっていない。

二音節の副詞には、これ以外にもう一種がある。「已经(すでに)」、「马上(すぐ)」、「刚好(ちょうど)」、「恰好(おりよく)」などは後置成分「的」をおくことのできないものである。一音節副詞は「的」を後ろにおくことができない。例えば、「很(とても)」、「光(だけ)」、「连(さえ)」など。しかし、一音節副詞のうちで、「真(ほんとうに)」のみは副詞の後置成分「的」をおくことができる。

㊤真的没有了。(ほんとうになくなってしまった。)

書き言葉においては、もともと状語になりえない名詞や動詞(それぞれ一音節のものは除く)の後ろに「的」をおいて副詞に転用することがある。この場合、「的」を「地」と表記することが多い。(いろいろな連語が状語

となるとき「地」を用いる。)

⑧形势主义地看问题。(形式主義的に問題を見る。)

⑨他关心地问。(彼は関心をよせてたずねる。)

⑩有计划地安排生产。(計画的な生産の手はずをととのえる。)

二音節形容詞で状語にもなる「仔細(詳しい)」、「勉強(無理)」、「大胆(大胆)」、「老实(誠実)」のようなものにも副詞の後置成分「的」をつけることができる。書き言葉では「的」を「地」と書くことが多い。

⑪仔细地看了一遍。(詳しく一回見た。)

⑫勉强地答应了。(無理に承知した。)

二音節形容詞で本来は状語になれないものも、副詞の後置成分「的」を後ろにおくことで状語になるものがある。これは書き言葉でよく用いられる。

⑬群众杂乱地喊着。(群衆は騒がしく叫んだ。)

⑭车身猛烈地震动了一下。(車体ははげしく震動した。)

二音節形容詞で状語にもなるものが、後ろに「的」をおく場合、それは述語を体詞化する助詞「的」であることもあり、また副詞の後置成分「的」であることもある。

⑮认真地记在心里。(まじめに心に記憶する。)

それ以外、) 副詞の後置成分「的」は次の三つの位置にもあらわれる。

(a)一部の並立複合語の後ろ

⑯无缘无故地发脾气。(なんの理由もなく、かんしゃくを起こす。)

(b)数量詞の重ねる形の後ろ

⑰一天一天地好起来了。(日ましによくなってきた。)

(c)擬声詞の後ろ

⑱扑通地跳下水去。(どぶんと水に飛び込む。)

(2) 状態詞の後置成分

状態詞は一般に後置成分「的」を伴うことが多い(「慢慢儿的」:のろのろした、「清清楚楚的」:はっきりした、「绿油油的」:青くつやつやした)。しかし、「的」を伴わない場合も多い。すなわち、二音節形容詞の重ねる形、

比喩的修飾成分をもつ二音節形容詞、何らかの後置成分をおく形容詞などが状態詞として働く場合は「的」を必要としないことがある。例えば、「干干净净（綺麗にさっぱりしている）」が状語・述語・補語になるとき、必ず「的」を伴わない（二音節形容詞の重ねる形はそのままでは定語になれないが、後置成分「的」をそえれば定語にもなれる）。また、「通红（真っ赤）」が述語になるときには、普通に「的」を伴わない。一方、このような「的」をとるとは限らない状態詞に対し、一般に一音節形容詞の重ねる形「很、挺、怪」などの程度副詞に修飾された形容詞などが状態詞として働く場合は必ず「的」をつけなければならない。例えば、「很奇怪的想法（とてもおかしい考え方）」、「挺漂亮的（とても美しい）」など。なお、「慢慢儿（ゆっくり）」、「好好儿（ちゃんと）」などは「的」を伴わないに「慢慢儿走（ゆっくり歩く）」とか「好好儿一本书（ちゃんとした一冊の本）」のように使う例を見ると、これは副詞として用いられたもので、状態詞になる場合はこれらも必ず「的」を伴う。例えば、「好好的人（ちゃんとした人）」、「睡得好好（ぐっすり眠った）」など。

これを言い換えれば、状態詞には二種あり、その一つは後置成分「的」があってもなくても、状態詞として働くが、もう一つは「的」がなければ、状態詞として働かないという二つである。（書き言葉では、この「的」が状語の位置に現れる場合、「地」と表記することが多い。）

これ以外、状態詞の後置成分「的」は次の位置にも現れる。

(a) 一部の並立複合詞の後ろ

㊟ 「大惊小怪（大げさにさわぎたてる）」の後ろに「的」をつけると、定語・述語・状語になれる。

(b) 四音節の擬声詞の後ろ

㊠ 「稀里哗啦（がたがた）」の後ろに「的」をおくと、定語・述語・状語になれる。

(3) 助詞

助詞の「的」は、述詞性（動詞性）成分を体詞性（名詞性）成分に変えるとき、その述詞性（動詞性）成分の後ろについて名詞相当語をつくる。

次はそれぞれの述詞について例をあげる。

動詞：買（買う）→买的（買うもの）、游泳（泳ぐ）→游泳的（泳ぐもの）

形容詞：好（よい）→好的（いいもの）、细心（注意深い）→细心的（注意深いもの）

二音節形容詞は一音節形容詞と異なり、「的」を伴って、定語ばかりでなく、状語にもなるものがある。例えば、「大胆（大胆）」は「大胆的人（大胆な人）」とも「大胆的想（大胆に考える）」ともいえる。同様に「细心（注意深い）」は「细心的学生（注意深い学生）」とも「细心的算（注意深く計算する）」ともいえる。それぞれ前者の「的」は助詞にあたるが、後者は副詞の後置成分にあたる。これに対し、同じの二音節形容詞でも「干净（きれいさっぱりとしている）」は状語にならない。「干净的穿在身上（さっぱりしたのは身につけている）」のように、主語になっている。状態詞（状態形容詞）は普通助詞の「的」と結ばない。しかし、指示代詞の修飾を受ける場合は、「那红红的的是牡丹（あの赤いのはボタンです）」のようにいえることがある。

述詞性（動詞性）成分を体詞性（名詞性）成分に変える機能は連語についてもみとめられる。

動賓連語：看电影（映画を見る）→看电影的（映画を見るもの、見たもの）

動補連語：洗干净（綺麗に洗う）→洗干净的（綺麗に洗うもの、洗ったもの）

主述連語：我写（私が書く）→我写的（私の書くもの、書いたもの）

連述連語：骑车来（自転車で来る）→骑车来的（自転車で来るもの、来たもの）

修飾連語：从中国来（中国から来る）→从中国来的（中国から来るもの、来たもの）

これらの例から見て、いずれも助詞「的」がつくことによって名詞相当語となり、意味も変化する。例えば、「吃」はもともと「食べる」という動作・行為を表すのに対し、「吃的」は「食べる人」とその動作・行為の主体

になり、あるいは「食べるもの」とその動作・行為の客体になる。動詞性成分に「的」がつくとき、その動詞の意味により、その動作・行為の主体も指すことができるし、また客体も指すことができる。双方をあらわせる場合は、前後の文脈を見ないと、意味を確定できない。例えば、「今天演的（今日演じるもの）」は俳優であるのか演目であるのか、これだけでは分からない。しかし、「今天演的是《白毛女》（今日演じるのは『白毛女』だ）」といえ、後者であることが分かる。なお、「今天所演的（今日演じるところのもの）」といえ、必ず後者で客体を指す。

助詞「的」は述詞性（動詞性）成分の後ろばかりでなく、体詞性（名詞性）成分の後ろにもつくことができる。もちろん、この場合は文法的機能の変化（述詞の体言化）は起こるはずはない。しかし、これによってできた名詞相当語が、もとの意味から変化していることは、述詞性成分の場合と同じである。

名詞：鉄（鉄）→铁的（鉄[製]のもの）

木头（木）→木头的（木[製]のもの）

代詞：我（私）→我的（私のもの）

数量詞連語：两块钱（二元）→两块钱的（二元のもの）

これらの助詞「的」を伴った連語を「的」字構造（「的」の連語）と呼ぶ。「的」の連語の文法的な性質は名詞にひとしく、数量詞の修飾を受けるが、副詞の修飾は受けない。

㊸一件洗干净的（一枚の洗って綺麗にしたもの）

㊹那个骑车来的（あの自転車で来たもの）

㊺最小/的（一番小さいもの）→最/小 的 ではない

↑ __ | （修飾）

↑ __ | （修飾）

㊻不看戏/的（芝居を見ないもの）→不/看戏的 ではない

↑ __ | （修飾）

↑ __ | （修飾）

「的」連語は名詞相当語として主語・賓語（目的語）になるほか、定語となることもできる。

㊼洗干净的多（洗って綺麗にしたものが多い）—主語

㉞挑洗干净的（洗って綺麗にしたのを選ぶ）—賓語（目的語）

㉟洗干净的衣服（洗って綺麗にした服）—定語

「的」の連語が定語となるとき、後ろにつづく中心語（被修飾語）が省略されることがある。そのため、「的」の連語は常に何らかの省略があるものと考えられやすい。しかし、「的」の連語は名詞相当語として、それ自身独立して存在し得るものである。

㊱白紙（白い紙）—「紙」を略しては「紙」を指ししめせない。

㊲白的紙（白い紙）—「紙」がなくても「紙」を指ししめせる。

㊳一张紙（一枚の紙）—「紙」がなくても「紙」を指ししめせる。

「白的紙」の構造は「白的/紙」であり、「白/的/紙」ではない。前者は名詞が名詞を修飾するものと分析し、「的」を「白」に附着した成分と見る。後者は形容詞が名詞を修飾するものと分析し、「的」を「白」と「紙」をむすびつけるものと見ている。

「的」の連語は名詞相当語として働くが、後置成分「的」を伴った状態詞は、形式はこれとよく似ていても名詞相当語にならないので、具体的な事物に代わって指ししめすことができない。

㊴我摘了一朵红的（花儿）（私は赤いのを一本つんだ）

㊵我摘了一朵红红的花儿（私は赤い花を一本つんだ）

後者では「花儿」を略せない。

3. まとめ

構造助詞「的」の表記と構造の歴史的な変化（唐の時代から現代における）は次の表1の通りになる。

表 1

| 時代 項目 | | 唐代 (618~907年) | 五代 (907~960年) | 宋代 (960~1279年) | 元・明・清代 (1271~1912年) | 現代 (1912年~現在) |
|----------|-------------|--------------------------|--------------------------|------------------------------------|------------------------------------|--|
| 表記 | | 「底」 | 「底」 | 「底」(一般的) 「的」(少ない) | 「底」(少ない) 「的」(一般的) | 「的」 |
| 構 造 | A + 底・的 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞 + 底 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞 + 底 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞 + 底・的 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞 + 底・的 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞 + 的 |
| | A + 底・的 + B | 動詞、形容詞 + 底 + 名詞 | 動詞、形容詞 + 底 + 名詞 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞 + 底・的 + 名詞 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞 + 底・的 + 名詞 | 名詞、代名詞、 動詞、形容詞、 *数量詞 + 底・的 + 名詞、*数量詞 |

(*話し言葉で用いられる)

表 1 でみると、「的」の表記と構造の歴史の変化ははっきり分かってきた。表記の方は、中国の唐代に「底」という漢字を使いはじめ、宋代に「的」という漢字は「底」の代わりに用いられた。その「的」の使用率は元代から普及されて、現代まではもう完全に「底」に取って代わっている。構造の方は、「A (名詞、代名詞、動詞、形容詞) + 底・的」の構造は唐代から現代までほとんど変わっていない。「A + 底・的 + B」の構造は唐代と五代では「的」の前に名詞と代名詞が出てない。それ以外、現在の話し言葉の中で、「数量詞 + 的 + 数量詞」の構造も用いられた。

用法からみると、「的」は最初の連体修飾と準体助詞の 2 つの機能から、現代中国語の副詞の後置成分、状態詞の後置成分と助詞 (朱德熙氏の『現代漢語語法研究』(1980 年) によると帰納された) の 3 つの機能に発展した。

参考文献（五十音順）

1. 王同亿主編（1992年） 『新現代漢語詞典』 海南出版社
2. 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1989年） 『言語学大辞典』 三省堂
3. 蔣紹愚 曹広順編（2004年） 『近代漢語語法史研究総述』 商務印書館
4. 朱德熙著（1980年） 『現代漢語語法研究』 商務印書館
5. 朱德熙著（1995年） 『文法講義』 白帝社
6. 大東文化大学中国語大辞典編纂室編（1993年） 『中国語大辞典』 角川書店
7. 中山時子監修 鹿琮世・藤山和子編著（1988年） 『新しい中国語語法』 東方書店
8. 松村文芳著（1997年） 「“得”字構造の中国語日本語対照研究」（『中国語教育』） 内山書店
9. 刘月华 潘文娛 故韡著（2001年） 『实用現代漢語語法』 商務印書館